

序章

第一節 概観 一、「抄物」の定義 5 二、名称の由来 5 三、範囲 5 (一)講義との関係 5 (二)注釈 6 (三)作成者・原典 6 (四)時代 6 (五)その他(文体・形態) 9 四、略史 (一)抄物の成立 11 (二)五山僧の抄物 11 (三)林下大応派僧の抄物 11 (四)博士家の抄物 11 (五)神道家の抄物 11 (六)公卿の抄物 11 (七)医家の抄物 11 (八)西国成立抄物における中心資料 11	第二節 「抄物(しようもの)」という語の成立と定着 17 一、「抄物(セウモツ)」 22 二、「抄物(じょうもの)」という語の成立 23 三、「抄物(じょうもの)」という語の定着 27 四、結論 28	第三節 抄物言語研究の回顧と展望 32 一、はじめに 32 二、第一期の研究 34 三、第二期の研究 37 四、第三期の研究 37	(一)資料の研究 37 1、資料の発掘整備 37 2、資料の外延についての研究 38 3、資料性の解明 39
---	---	--	---

1、文法の研究	40
(1) 助動詞の研究	40
(2) 助詞の研究	40
(3) 動詞活用の研究	41
(4) 文構造の研究	41
2、待遇表現の研究	42
3、語詞語彙の研究	42
(1) 意義分野語彙の研究	42
(2) 擬声擬態語彙の研究	42
(3) 品詞単位に見た語彙の研究	42
(4) 基礎語彙・基本語彙の研究	42
(5) 語詞の研究	43
(6) 語詞の利用	43
4、音韻の研究	43
5、文字表記の研究	44
6、索引・用例集・注釈	44
7、東国語系抄物の言語についての研究	45
五、展望	46
(1) 国語学者以外の研究	46
第四節 本書の目的	47
第一章 抄物の成立	57
第一節 院政期までの注釈活動——中山法華経寺本『三教指帰注』の成立	59
一、はじめに	59
二、『三教指帰』の注釈書の中での中山法華経寺本の位置	59
(1) 院政期鎌倉初期成立の『三教指帰』の注釈書	59
(2) 承久仮名注——文語体仮名注の成立	61
(3) 中山法華経寺本——口頭語を露呈する仮名注の成立	65
三、院政期までの注釈活動から	69
(1) 院政期までの注釈活動	69
(2) 中山法華経寺本『三教指帰注』成立の背景	74
四、おわりに	76
付、注釈(院政期以前)関係参考文献	77
第二節 鎌倉時代の片仮名交り注釈書——明恵の講義とその聞書を中心にして	88
一、はじめに	88
二、鎌倉時代の片仮名交り注釈書	90
(1) 華嚴宗	90
(2) 天台宗	90
(3) 真言宗	90

(四)金沢称名寺.....	92
(五)浄土宗.....	92
(六)浄土真宗.....	91
(七)日蓮宗.....	92
(八)禅宗.....	91
三、明恵の講義とその聞書.....	97
(一)伝存する聞書と伝記等に見える講義の記事.....	93
(二)講義の実態.....	93
(三)聞書成立の実態.....	93
四、おわりに	101
付、明恵聞書類関係参考文献	105
第三節 曲直瀬道三『類証弁異全九集』について——訓点資料と抄物との 連続性の問題——	106
一、『類証弁異全九集』の諸本	118
二、抄物の中における道三『類証弁異全九集』の位置	118
(一)はじめに	127
(二)月湖の『類証弁異全九集』	127
(三)和訳の態度	128
(四)和訳の位置	134
四、おわりに	144
三、中世日本語研究資料としての『類証弁異全九集』	143
(一)原典の和訳	144
(二)先行書の継承	144
(三)語詞・語彙研究資料	144
四、おわりに	158
付一、元和古活字单辺一二行本『類証弁異全九集』・内閣文庫蔵江戸初期写平仮 名交り本校異表	161
付二、道三『類証弁異全九集』月湖『類証弁異全九集』対照表	160
第四節 「書入れ仮名抄」	195
一、はじめに	215
二、範囲	215
三、抄物の成立と継承	224
四、抄物作成活動の全体像	223
五、語学資料としての性格	219
六、おわりに	231
第二章 五山僧の抄物	233
第一節 希頃周顕講『論語講義筆記』と断定の助動詞「ダ」	228

一、はじめに	233
二、講者ならびに成立事情等	233
(一)書誌	
(二)講者希頃周顕	
1、出身	239
2、南禅寺における修業	237
3、寛正六年三条六角における論語の講義	237
4、丹波徳蔵院時代と洛中における講義	238
5、知友ならびに法嗣	239
(三)『論語講義筆記』	
(一)京都語の「ダ」	241
(二)言語の古色性	241
四、結論	246
第二節 桃源瑞仙聞書・抄『史記抄』の本文について	248
—『漢書抄』との関係から—	248
一、はじめに	252
二、桃源の『漢書抄』利用	252
三、牧中の『漢書抄』利用	253
四、先行抄物の利用	261
五、おわりに	264
第三節 桑山浩然氏蔵『十八史略』三国の抄	265
一、はじめに	271
二、形態	271
三、原典『十八史略』	272
(一)伝本	272
(二)二巻本と七巻本	273
(三)旧蔵者	276
四、室町時代における『十八史略』ならびに『三国志』への関心	276
(一)『十八史略』	277
1、抄物	282
(1)書入れ仮名抄	282
(2)『十八史略』を利用した抄物	282
2、記録類に見える『十八史略』	280
(一)『三国志』	277
五、中国史書の抄物中における『十八史略』三国抄の位置	276
(一)中国史書への関心	276
1、桃源瑞仙『史記抄』	281

2、記録類に見える中国史書への関心

- | | |
|---------------------------------|-----|
| 1、特定の原典に対する抄物 | 283 |
| (1)春秋左氏伝抄 | 283 |
| (2)歴史書 | 283 |
| i、史記抄 | 284 |
| ii、漢書抄 | 284 |
| 2、書入れ仮名抄 | 284 |
| (1)春秋 | 285 |
| (2)史記 | 286 |
| (3)蒙求 | 286 |
| 3、特定の原典をもたない一種の抄物 | 287 |
| 4、関連資料 | 287 |
| 5、中国史書に対する抄物の全体像 | 288 |
| 六、『十八史略』三国の抄物 | 289 |
| (一)成立 | 295 |
| (二)原形 | 296 |
| (三)抄者 | 297 |
| 七、おわりに | 299 |
| 第四節 柏舟宗趙講横川景三聞書系『周易抄』について | 302 |
| 一、はじめに | 302 |
| 二、柏舟講系『周易抄』の継承発展 | 302 |
| (一)いわゆる増補本は編集本である | 302 |
| (二)編集本系本文の腑分け | 302 |
| (三)語学資料としての『周易抄』 | 302 |
| 四、諸本の本文の異同に注目する研究 | 302 |
| 三、原典ならびに中国側注釈書とのかかわり | 302 |
| 四、おわりに | 302 |
| 第五節 桂林徳昌講一元光演聞書『古文真宝抄』・彦竜周興講某聞書 | 317 |
| 一、はじめに | 317 |
| 二、桂林徳昌講一元光演聞書『古文真宝抄』 | 317 |
| 『古文真宝抄』について | 317 |
| (一)講抄者および講抄の時期 | 321 |
| (二)桂林徳昌の抄物 | 321 |
| (三)桂林徳昌の傳本 | 321 |
| (四)先人の説の繼承 | 321 |
| 三、彦竜周興講某聞書『古文真宝抄』 | 321 |
| 『古文真宝抄』について | 321 |
| (一)傳本 | 321 |
| (二)講抄者および講抄の時期 | 321 |
| (三)桂林徳昌の抄物 | 321 |
| (四)先人の説の繼承 | 321 |

(二) 講抄者および講抄の時期	345												
(三) 先人の説の継承	345												
四、笑雲清三抄『古文真宝抄』	349												
(一) 伝本	352												
(二) 先人の説の継承	355												
五、おわりに	355												
第六節 慶應義塾大学三田情報センター蔵『中庸抄』について	364												
一、はじめに	364												
二、講者	364												
三、聞書としての『中庸抄』	364												
(一) 抄中に見える日付	364												
(二) 注釈の速さ	364												
(三) 本文の訂正補入等	364												
(四) 整わぬ文	364												
(五) 表記	364												
(六) 文の長さ	364												
(七) 文語体	364												
四、おわりに	364												
第七節 月舟寿桂・繼天寿戻抄『錦繡段抄』	375												
383	381	381	380	379	378	376	375	375	375	375	375	375	
383	381	381	380	379	378	376	375	375	375	375	375	375	375
第八節『続錦繡段抄』の漢文注と仮名抄	384												
一、原典『錦繡段』	384												
二、諸本	384												
三、版本系本文から見た諸本	384												
四、抄者ならびに諸本の展開	384												
五、おわりに	384												
第九節 惟高妙安抄『玉塵』の原典『韻府群玉』について	396												
一、『韻府群玉』研究の意義	396												
二、『韻府群玉』の諸版	396												
三、両足院本漢文注	396												
四、おわりに	396												
第九節 惟高妙安抄『玉塵』の原典『韻府群玉』について	408												
一、はじめに	408												
二、漢文注と仮名抄	408												
三、両足院本漢文注	408												
四、おわりに	408												
第九節 惟高妙安抄『玉塵』の原典『韻府群玉』について	414												
一、『韻府群玉』研究の意義	414												
二、『韻府群玉』の諸版	414												
三、抄に用いられた版と底本	414												
(一) 参考された本	414												
(二) 参照された本	414												
(三) 「元本」と「今本」	414												
四、その他	414												

四、結語

第一〇節 『作物記抄』について——室町時代末期成立の一抄物——

一、はじめに

二、抄者

三、抄物史上の位置

四、おわりに

第一一節 策彦周良の手になる片仮名交りゾ体の資料について

一、はじめに

二、各資料の整備

(一)『蠶測集』

(二)『策彦和尚筆記』

(三)『四六図』

(四)『策彦和尚初渡集』

(五)『策彦和尚再渡集』備忘記

三、策彦の片仮名交りゾ体文體の性格

(一)原典離れ・注釈書離れ

(二)注記的・断片的性格

(三)固定的性格

四、おわりに

第一二節 聯句の抄物

一、はじめに

二、大谷大学図書館蔵『〔聯句抄〕』と龍谷大学図書館蔵『対吠詩集』

三、足利学校遺蹟図書館蔵『〔聯句集〕』

四、本資料のもつ意味

第一三節 渡辺綱也氏旧蔵『聯句抄集成』について

一、はじめに

二、本書の構成と出拠

(一)構成

(二)第一部(1丁~2丁)

(三)第二部(3丁~217丁)

1、第二部の出拠

2、出拠本文との関係

3、『九千句』の抄

四、第三部(218丁~277丁)

第一四節 特定の原典をもたない一種の抄物

一、はじめに

三、末期抄物としての性格

第一四節 特定の原典をもたない一種の抄物

二、各資料の概略
 三、抄物の中での位置
 四、おわりに

第一五節 辞書・事典に連続する抄物群——詩文作成のための抄物の場合——

- 一、本節の意図
- 二、作成目的から見た類別
- 三、詩文を作成するためのもの
- (一) 管見に入った資料
- 1、該当資料
- 2、旧稿以後管見に入った資料
- (1) 『句寄語』
- (2) 『金玉和襟集』
- (3) 『古事書』
- (4) 大東急記念文庫蔵『雜抄』
- (5) 東京大学文学部国語研究室蔵『伝燈集』
- (6) 慶應義塾大學三田情報センター蔵『禍事集』
- (7) 斯道文庫蔵『詩聯要津』
- (8) 山田忠雄氏蔵『(故事集)・八景詩(抄)』
- (9) 『史漢物語』

第一六節 江戸時代初期における禅僧の抄物作成活動

- 一、はじめに
- 二、抄物の作成
- 三、書入れ仮名抄の作成
- 四、抄物の書写
- 五、抄物の版行
- 六、抄物を利用した著作
- 七、おわりに

第一七節 『国花集』と『増補国華集』との抄物利用

——江戸時代における抄物の搖曳——

- 一、はじめに
- 二、『国花集』——諸版・成立——
- 三、『増補国華集』——諸版・『国花集』との関係・成立——
- 四、『国花集』の抄物利用
- 五、『増補国華集』の抄物利用

六、江戸時代におけるゾ体の文体
 七、おわりに

第三章 林下大応派僧の抄物

第一節 松ヶ岡文庫所蔵の仮名抄と研究の現段階

一、仮名抄ならびに関係資料

二、研究の現段階

三、戦前の研究

(一)『禅籍抄物集』発刊以前の戦後の研究

(二)『禅籍抄物集』の発刊とそれ以後

三、おわりに

第二節 大応派の『臨済録抄』について

一、はじめに

二、大徳寺系『臨済録抄』

(一)④本||尊経閣文庫蔵天文二三年写八冊

(二)⑤本||足利学校遺蹟図書館蔵江戸初期写零本一冊

(三)⑥本||駒沢大学図書館蔵室町末期写三冊(魯一六三)

(四)⑬本||松ヶ岡文庫蔵沢庵宗彭抄寛永四年写四冊(無番号)

(五)大徳寺系四抄

671

668

666

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

659

633

634

643

645

645

647

647

647

647

647

647

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

645

第三節 『句双紙抄』の諸本とその言語

一、はじめに

二、内容分類体系本と字数分類体系本との関係

(一)両系統本とその先後関係

(二)山鹿本の増補部分

(三)山鹿本の言語の性格

1、山鹿本の表現は他本のそれに比べて簡略である

699

699

693

693

693

693

687

685

682

681

680

678

676

673

672

2、山鹿本の言語は他本のそれに比べて文語色が濃い···	773
(1)他の三本音便形—山鹿本原形···	773
(2)活用形の相違···	772
(3)助動詞類の対応···	772
(4)助詞の相違···	768
(5)他の三本格助詞ガ—山鹿本無···	768
(6)語詞の相違···	767
(7)表記の相違···	767
3、山鹿本は他本に比べて一般的な表現を用いる傾向がある···	755
三、内容分類体本三本の関係とその言語···	755
(一)東大本・土井本・明暦版本の関係···	752
1、卷末増補···	748
2、書誌的形態···	748
3、禅句数···	748
4、本文···	745
(二)東大本・土井本・明暦版本の言語···	745
四、おわりに···	745
第四章 幻住派の抄物 ···	745
幻住派の抄物——九州において外交に当った僧たちの抄物—— ···	745
一、はじめに ···	743
二、湖心(頤賢) 碩鼎とその抄物 ···	743
(一)略歴 ···	743
(二)その抄物 ···	743
1、策彦周良聞書『無門関抄』···	743
2、湖心抄『無門関抄』(不伝)···	743
3、頤仲碩養伝受『密參録』···	743
(三)抄物の特徴 ···	743
1、五山・林下二面的性格 ···	743
2、九州方言 ···	743
3、明僧からの直接の学習 ···	743
三、規伯玄方とその抄物 ···	743
(一)略歴 ···	743
(二)その抄物——『禪宗無門關私鈔』 ···	743
1、幻住派の説 ···	743
(1)湖心(頤賢) 碩鼎の説 ···	743
(2)景轍玄蘇の説 ···	743
2、大応派の説 ···	743
3、五山派の説 ···	743
4、その他邦人の説 ···	743

2、山鹿本の言語は他本のそれに比べて文語色が濃い···	705
(1)他の三本音便形—山鹿本原形···	705
(2)活用形の相違···	705
(3)助動詞類の対応···	705
(4)助詞の相違···	705
(5)他の三本格助詞ガ—山鹿本無···	705
(6)語詞の相違···	705
(7)表記の相違···	705
3、山鹿本は他本に比べて一般的な表現を用いる傾向がある···	705
三、内容分類体本三本の関係とその言語···	705
(一)東大本・土井本・明暦版本の関係···	705
1、卷末増補···	705
2、書誌的形態···	705
3、禅句数···	705
4、本文···	705
(二)東大本・土井本・明暦版本の言語···	705
四、おわりに···	705
第四章 幻住派の抄物 ···	705
幻住派の抄物——九州において外交に当った僧たちの抄物—— ···	705
一、はじめに ···	705
二、湖心(頤賢) 碩鼎とその抄物 ···	705
(一)略歴 ···	705
(二)その抄物 ···	705
1、策彦周良聞書『無門関抄』···	705
2、湖心抄『無門関抄』(不伝)···	705
3、頤仲碩養伝受『密參録』···	705
(三)抄物の特徴 ···	705
1、五山・林下二面的性格 ···	705
2、九州方言 ···	705
3、明僧からの直接の学習 ···	705
三、規伯玄方とその抄物 ···	705
(一)略歴 ···	705
(二)その抄物——『禪宗無門關私鈔』 ···	705
1、幻住派の説 ···	705
(1)湖心(頤賢) 碩鼎の説 ···	705
(2)景轍玄蘇の説 ···	705
2、大応派の説 ···	705
3、五山派の説 ···	705
4、その他邦人の説 ···	705

(1) 「古抄」	(2) 「或古抄」	(3) 「或抄」	(4) 「新刊ノ抄」	(5) 「余抄」	(6) 「他派ノ禅老」															
四、嘯岳鼎虎（昌虎）とその抄物	五、古帆周信との抄物	六、おわりに	五、古帆周信との抄物	四、嘯岳鼎虎（昌虎）とその抄物	四、嘯岳鼎虎（昌虎）とその抄物															
(一) 略歴	(二) その抄物	(三) 抄物の特徴	(四) 抄物の特徴	(五) 朝鮮僧の説	(六) 「他派ノ禅老」															
第五章 博士家・神道家の抄物	第一節 清原業忠の論語抄について	一、業忠の講義	二、第一種業忠本	三、業忠抄	四、「古抄」															
(一) 講者の確認	(二) 東急本の「師講」と東洋本	(三) 東急本の「師講」以外の部分と東洋本	(四) 二本間の本文の相違	(五) 第一種業忠講本の性格	(六) 第二種業忠本															
第二節 清原宣賢自筆『三略秘抄』の本文の性格について	第一節 清原業忠の論語抄について	一、業忠の講義	二、第一種業忠本	三、業忠抄	四、「古抄」															
一、本節の意図	(一) 先学の説	(二) 先学の説	(三) 先学の説	(四) 先学の説	(五) 先学の説															
二、中国側注釈書への依拠	(一) 依拠の実態	(二) 依拠の実態	(三) 依拠の実態	(四) 依拠の実態	(五) 依拠の実態															
三、良賢抄への依拠	(一) 依拠の事実から見た語学資料としての性格	(二) 依拠の事実から見た語学資料としての性格	(三) 依拠の事実から見た語学資料としての性格	(四) 依拠の事実から見た語学資料としての性格	(五) 依拠の事実から見た語学資料としての性格															
四、今後の課題	(一) 尊經閣文庫蔵『三略秘抄』と宣賢抄『三略秘抄』	(二) 尊經閣本の奥書・識語の検討	(三) 両抄の言語の比較	(四) 両抄の言語の比較	(五) 両抄の言語の比較															
第三節 清原宣賢抄『孝經秘抄』について	877	872	871	858	848	844	841	840	831	827	825	825	815	810	805	802	796	794	791	790

(一) 表現法上の相違
(二) 語詞の相違

四、おわりに

第四節 静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』について

一、書誌	静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』について
二、江戸初期以前成立の二十四孝関係仮名交り注釈書の中での位置	
(一)『全相二十四孝詩選』抄と『孝行錄』系本混淆抄	
(二)注釈型と事績説明型	
1、第一類 五言詩注釈型本	893
2、第二類 七言詩注釈型本	891
3、第三類 事績説明型本	890
4、第一類 注釈型本	892
5、第二類 事績説明型本	891
三、抄者ならびに抄の時期	
(一)抄者	
1、龍谷大学本との関係	893
2、『逆耳集』と『金匱集』の場合	891
3、他抄の抄者	890
(二)成立時期	
四、末期抄物としての性格	
第五節 神道家の抄物	
一、はじめに	916
二、吉田兼俱の抄物	915
(一)『中臣祿抄』	914
(二)『神代六首和歌抄』	913
(三)『中臣祿抄』	912
1、兼俱抄	911
2、兼俱講	910
(四)『祓八ヶ大事』	910
(五)五山禪僧との交渉	909
三、吉田兼致の抄物	908
四、吉田兼右の抄物	907
(一)『日本書紀抄』	906
(二)『日本書紀歌註』	905
(三)『中臣祿抄』	904
(四)『梵天帝釈委注』	903
五、吉田兼見の抄物	902
(一)『日本書紀抄』	901
(二)『中臣祿抄』	900
(三)『詔抄』	899
六、梵舜の抄物	898
七、吉田兼隆の抄物	897
八、清原宣賢の抄物	896
九、宣賢抄	895

三、武家側『御成敗式目抄』乙種斎藤家説・問注所説引用抄	1013
(一)諸本.....	1013
(二)抄者.....	1013
(三)言語.....	1013
四、武家側『御成敗式目抄』丙種安保説・殖野説引用抄	1013
(一)諸本.....	1013
(二)抄者.....	1013
(三)言語.....	1013
五、武家側『御成敗式目抄』丁種安保説・殖野説引用抄	1013
(一)諸本.....	1013
(二)抄者.....	1013
(三)言語.....	1013
六、おわりに.....	1025
第八章 足利学校の抄物	1025
語学資料として見た足利学校関係の仮名抄	1031
一、はじめに.....	1033
二、歴代庠主の手になる抄物	1033
(一)第五世庠主東井に関係のある抄物	1033
1、「論語発題」.....	1034
2、「六韜」.....	1034
3、「付音増古註蒙求」.....	1034
(一)第七世庠主九華の抄物	1036
1、「論語遺忘記」.....	1036
2、「六韜」.....	1036
3、「付音増古註蒙求」.....	1036

(一)『中臣祇抄』.....	961
2、宣賢講.....	961
1、宣賢抄.....	961
2、宣賢講.....	961
九、清原国賢の抄物	961
一〇、おわりに	961
第六章 医家の抄物	965
医家の抄物	965
一、はじめに	969
二、医家の抄物の範囲と類別	971
三、抄物を作成した医家	972
(一)曲直瀬家系統の抄物	975
(二)その他の医家の抄物	976
四、五山禅僧の影響	982
五、おわりに	990
第七章 武家の抄物	999
武家の手になる『御成敗式目抄』	999
一、はじめに	1001
二、武家側『御成敗式目抄』甲種問注所説引用抄	1001
(一)諸本.....	1001
(二)抄者.....	1001
(三)言語.....	1001
三、武家側『御成敗式目抄』乙種斎藤家説・問注所説引用抄	1003
(一)諸本.....	1003
(二)抄者.....	1003
(三)言語.....	1003
四、武家側『御成敗式目抄』丙種安保説・殖野説引用抄	1006
(一)諸本.....	1006
(二)抄者.....	1006
(三)言語.....	1006

第一節 東国語系抄物の言語指標	1091
一、従来の研究とその問題点	1093
(一) 東西方言対立についての研究	1093
(二) 従来の東国語系抄物の研究	1094
二、打消の助動詞における東西対立の成立	1098
三、音便における東西対立の成立	1099
(一) 行動詞のウ音便と促音便	1100
(二) 形容詞連用形のウ音便形と原形	1101
四、断定の助動詞における東西対立の成立	1102
五、おわりに	1104
第二節 日光山天海藏『人天眼目聞書』の成立地	1108
一、はじめに	1119
二、天海藏『人天眼目聞書』の成立地	1119

第三章 洞門僧の抄物	1056
第一節 東国語系抄物の言語指標	1056
一、従来の研究とその問題点	1058
(一) 語学資料として見た足利学校関係抄物の性格	1059
(二) 京畿の抄物に見える足利学校の訓読	1060
六、おわりに	1062
五、足利学校の言語	1063
(一) 子書の抄物	1064
(二) 集書の抄物	1065
(三) 国書の抄物	1066
四、その他抄者未詳の抄物	1067
(一) 経書の抄物	1068
三、来学者および招来者の手による抄物	1069
(一) 柏舟宗趙(一四一六一九五)の抄物	1070
(二) 柏現震(生没年未詳)の抄物	1071
二、『黄山谷詩集註』	1072
(三) 第九世岸主三要の抄物	1073
1、『春秋經伝抄』	1074
2、『春秋經傳集解』	1075
3、『孟子趙註』	1076
4、『施氏七書講義』	1077
5、『職原抄』	1078
一、周易講義	1079
2、『易學啓蒙通釈口義』	1080
3、『韻鏡聞書』	1081
4、『新刊勿聽子俗解八十一難經抄』	1082
5、『難經雲庵抄』	1083
(三) 田代三喜(一四五一一五三六)	1084
(四) 一勤□厚(善応軒)(生没年未詳)	1085
(五) 安保氏泰(生没年未詳)	1086
(六) 芳郷光隣(一一五三六)	1087
(七) 道器蓬庵(生没年未詳)	1088
(八) 曲直瀬道三(正慶・一溪)(一五〇八一九五)	1089
(九) 要法寺日性(一五五四一一六一四)	1090
四、その他抄者未詳の抄物	1091
(一) 経書の抄物	1092

三、古活字版への付訓書入れと寛永一〇年整版の言語	1175
四、寛永一〇年整版の付訓	1168
五、結論	1163
第五節 洞門抄物『聯珠詩格抄』について	1186
一、はじめに	1189
二、書誌的事項	1190
三、原典と抄	1191
四、抄の言語	1192
(付)	1205
第六節 僧の手になる一系統の『三略抄』(服部謙太郎氏蔵本その他)について	1199
一、はじめに	1221
二、抄者	1221
三、諸本	1221
四、中国側注釈書との関係——宣賢抄と比較して	1225
五、その言語の性格——宣賢抄と比較して	1230
六、おわりに	1240
第一〇章 抄物に連続する室町時代注釈書	1251
第一節 室町時代における諸宗派の注釈書	1253
一、はじめに	1253
二、諸宗派の片仮名交り注釈書一斑	1254

四、おわりに	常州佐竹・太田における抄物作成活動
第三節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の古活字版	
一、はじめに	
二、諸版とその関係	
(一) 諸版	
(二) 古活字版諸版の関係	
1、元和八年古活字版と寛永元年古活字版	
2、寛永二年古活字版・寛永五年古活字版・寛永二年整版	
三、語学的立場から見た古活字版諸版の本文	
四、おわりに	
第四節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の整版	
一、はじめに	
二、整版の相互関係	
(一) 伝存する整版	
(二) 寛永二年刊記整版二種(上記①②)の相互関係とその出自	
(三) 寛永一〇年刊整版の出自	
1、古活字版諸版との近似	
2、寛永元年古活字版と寛永二年整版と寛永二年整版	
3、寛永二年整版か寛永二年整版か	
四、正保三年整版の出自	
五、慶安元年整版の出自	
(六) 諸版の関係	

索引	1444	1442	1438	1323	1319	1304	1303	1300
結章								
付録 抄物関係文献目録								
初出一覧								
あとがき								

(一) 日蓮宗	1298	(二) 浄土真宗	1297	(三) 浄土宗	1291	(四) 天台宗	1289	(五) 真言宗	1289	(六) その他	1287	(七) 天台宗	1282	(八) その他	1276	(九) 真言宗	1274	(十) その他	1273	(十一) 浄土宗	1272	(十二) その他	1271	(十三) 日蓮宗	1269	(十四) その他	1267	(十五) 浄土宗	1265	(十六) その他	1258	(十七) 天台宗	1256	(十八) その他	1256	(十九) 真言宗	1254
第一編 第二節 第一章	抄物以後	林羅山の仮名交り注釈書について——抄物との関連から——	一、はじめに	二、羅山と京都五山禪林	三、羅山の仮名交り注釈書	四、抄物との相違点	(一) 実学性	(二) 自立性	(三) 文語性	(四) おわりに	(五) おわりに																										

第一節 概 観

一、「抄物」の定義

「抄物（しょうもの）」とは、主として室町時代に、京都五山の禅僧、博士家の学者、神道家、公卿、医家、足利学校の庠生とその門下、曹洞宗の僧などが作成した、漢籍や仏典や、また一部の国書に対する注釈書をいう。その中心となるのは講義の聞書として成立したものであるが、講義のための草案である手控や、講義を伴わない注釈書をも、これに含めるのが普通である。広くは漢文体のものを含めることもあり、これを除くことを明示する場合には「仮名抄^{（注）}」と呼ばれる。また、形態から見ると、一書の形を成した注釈書だけでなく、原典への書入れをも含み、仮名交り体の書入れのある資料は、これを「書入れ仮名抄」と呼ぶ。

「抄物」の英訳としては the Commentaries (using Kana) (originated in the Muromachi Period) が用いられる。室町時代言語資料の一で、キリストン資料・狂言とともに特に口語資料として価値が高い。

二、名称の由来

平安時代から「セウモツ（チ）（抄物）」の語があり、これは、手写したもの、抜き書きしたもの、歌作のための参考書、さらに注釈書の意で用いられた。本来抜き出す・謄写する意の「抄（鈔）」が注釈を意味するようになつたのは、本文の一部を抜き出して解釈するからとも、注疏から必要な部分を抜き集めるからとも言う。『清家代々の譲状』や『言継卿記』

第五章 博士家・神道家の抄物

第一節 清原業忠の論語抄について	785
一、業忠の講義	787
二、第一種業忠本	789
(一)先学の説	787
(二)講者の確認	789
(三)東急本の「師講」と東洋本	790
(四)東急本の「師講」以外の部分と東洋本	791
(五)二本間の本文の相違	792
(六)第一種業忠講本の性格	793
三、第二種業忠本	794
四、業忠講本と良賢講本	795
五、おわりに	796
第二節 清原宣賢自筆『三略秘抄』の本文の性格について	
一、本節の意図	825
二、中国側注釈書への依拠	825
(一)依拠の実態	826
(二)依拠の事実から見た語学資料としての性格	827
第三節 清原宣賢抄『孝経秘抄』について	
一、はじめに	840
二、中国側注釈書『孝経述議』との関係	841
三、良賢抄『古文孝経聞書』との関係	841
(一)表現法上の相違	842
(二)語詞の相違	843
四、おわりに	843
第四節 静嘉堂文庫蔵『二十四孝詩註』について	
一、書誌	891
二、江戸初期以前成立の『二十四孝関係仮名交り注釈書の中での位置	891
(一)『全相二十四孝詩選』抄と『孝行録』系本混淆抄	892
(二)注釈型と事績説明型	893
三、第一類 五言詩注釈型本	893
四、おわりに	893

第五章	2、第二類	七言詩注釈型本
(3)	3、第三類	事績説明型本
4、第一類	注釈型本	
5、第二類	事績説明型本	
三、抄者ならびに抄の時期		
(一)抄者		
1、龍谷大学本との関係		
2、「逆耳集」と『金句集』の場合		
3、他抄の抄者		
(二)成立時期		
四、末期抄物としての性格		
第五節 神道家の抄物		
一、はじめに		
二、吉田兼俱の抄物		
(一)『日本書紀抄』		
1、兼俱抄		
2、兼俱講		
(二)『神代六首和歌抄』		
(三)『中臣祓抄』		
1、兼俱抄		
941 941 938 936 936 936 935 935 916 915 914 912 905 905 904 903 902 901		
2、兼俱講		
(四)『祓八ヶ大事』		
(五)五山禪僧との交渉		
三、吉田兼致の抄物		
四、吉田兼右の抄物		
(一)『日本書紀抄』		
(二)『日本書紀歌註』		
(三)『中臣祓抄』		
(四)『梵天帝釈委注』		
五、吉田兼見の抄物		
(一)『日本書紀抄』		
(二)『中臣祓抄』		
(三)『謡抄』		
六、梵舜の抄物		
八、清原宣賢の抄物		
(一)『日本書紀抄』		
七、吉田兼隆の抄物		
1、宣賢抄		
2、宣賢講		
(二)『中臣祓抄』		

三、武家側『御成敗式目抄』乙種斎藤家説・問注所説引用抄
　(一)諸本
　(二)抄者
　(三)言語

四、武家側『御成敗式目抄』丙種安保説・殖野説引用抄
　(一)諸本
　(二)抄者
　(三)言語

五、武家側『御成敗式目抄』丁種安保説・殖野説引用抄
　(一)諸本
　(二)抄者
　(三)言語

六、おわりに

一、はじめに

第八章 足利学校の抄物

語学資料として見た足利学校関係の仮名抄
一、はじめに

第六章 医家の抄物

医家の抄物

- | | |
|---------------|-----|
| 一、はじめに | 971 |
| 二、医家の抄物の範囲と類別 | 972 |
| 三、抄物を作成した医家 | 975 |
| (一)曲直瀬家系統の抄物 | 976 |
| (二)その他の医家の抄物 | 982 |
| 四、五山禅僧の影響 | 986 |
| 五、おわりに | 990 |

第七章 武家の抄物

武家の手になる『御成敗式目抄』

- ## 二、はじめに

一諸本：

- (二) 言語抄者
(三) 言語

三、武家側『御成敗式目抄』乙種斎藤家説・問注所説引用抄
(一) 諸本

(三) 言語

四、武家

- (三) 言語
四、武家側『御成敗式目抄』丙種安保説・殖野説引用抄
(一) 諸本
(二) 抄者

五、武家側『御成敗

(一) 諸本：

- 六、おつりこ
（一）諸本
（二）抄者
（三）言語

八章 足利學

卷之三

- 語学資料として見た足利学様關係の假名抄
一、はじめに

- 二、歴代庠主の手になる抄物
- (一)第五世庠主東井に関係のある抄物
- 1、「論語発題」
 - 2、「六韜」
 - 3、「付音増広古註蒙求」
- (二)第七世庠主九華の抄物
- 1、「論語遺忘記」
 - 2、「黃山谷詩集註」
- (三)第九世庠主三要の抄物
- 1、「春秋經伝抄」
 - 2、「春秋經伝集解」
 - 3、「孟子趙註」
 - 4、「施氏七書講義」
 - 5、「職原抄」
- 三、来学者および招來者の手になる抄物
- (一)柏舟宗趙(一四一六—九五)の抄物
- (二)一柏現震(生没年未詳)の抄物
- 1、「周易講義」
 - 2、「易学啓蒙通釈口義」
 - 3、「韻鏡聞書」
- 4、「新刊勿聽子俗解八十一難經抄」
- 5、「難經雲庵抄」
- (三)田代三喜(一四五一一五三七)
- (四)一勤□厚(善心軒)(生没年未詳)
- (五)安保氏泰(生没年未詳)
- (六)芳郷光隣(一一五三六)
- (七)道器蓬庵(生没年未詳)
- (八)曲直瀬道三(正慶・一溪)(一五〇八—一九五)
- (九)要法寺日性(一五五四—一六一四)
- 四、その他の抄者未詳の抄物
- (一)経書の抄物
- (二)子書の抄物
- (三)集書の抄物
- (四)国書の抄物
- 五、足利学校の言語
- (一)語学資料として見た足利学校関係抄物の性格
- (二)京畿の抄物に見える足利学校の訓読
- 六、おわりに

第九章 洞門僧の抄物

第一節 東国語系抄物の言語指標	1167
一、従来の研究とその問題点	1167
(一)東西方言対立についての研究	1165
(二)従来の東国語系抄物の研究	1164
二、打消の助動詞における東西対立の成立	1162
三、音便における東西対立の成立	1157
(一)ハ行動詞のウ音便と促音便	1156
(二)形容詞連用形のウ音便形と原形	1155
四、断定の助動詞における東西対立の成立	1155
五、おわりに	1155
第二節 日光山天海藏蔵『人天眼目聞書』と常州佐竹における抄物作成活動	1130
一、はじめに	1129
二、天海藏蔵『人天眼目聞書』の成立地	1129
三、常州佐竹・太田における抄物作成活動	1125
四、おわりに	1123
第三節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の古活字版	1119
一、はじめに	1119
二、諸版	1131
(一)諸版	1130
(二)古活字版諸版の関係	1130
1、元和八年古活字版と寛永元年古活字版	1146
2、寛永二年古活字版・寛永五年古活字版・寛永二年整版	1142
三、語学的立場から見た古活字版諸版の本文	1148
四、おわりに	1151
第四節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の整版	1155
一、はじめに	1155
二、整版の相互関係	1155
(一)伝存する整版	1155
(二)寛永二年刊記整版二種（上記①②）の相互関係とその出自	1155
(三)寛永一〇年刊整版の出自	1155
1、古活字版諸版との近似	1155
2、寛永元年古活字版と寛永二年整版と覆寛永二年整版	1155
3、寛永二年整版か覆寛永二年整版か	1155
(四)正保三年整版の出自	1155
(五)慶安元年整版の出自	1155
(六)諸版の関係	1155

第一節 東国語系抄物の言語指標	1093
一、従来の研究とその問題点	1093
(一)東西方言対立についての研究	1093
(二)従来の東国語系抄物の研究	1093
二、打消の助動詞における東西対立の成立	1094
三、音便における東西対立の成立	1094
(一)ハ行動詞のウ音便と促音便	1094
(二)形容詞連用形のウ音便形と原形	1094
四、断定の助動詞における東西対立の成立	1098
五、おわりに	1098
第二節 日光山天海藏蔵『人天眼目聞書』と常州佐竹における抄物作成活動	1098
一、はじめに	1098
二、天海藏蔵『人天眼目聞書』の成立地	1098
三、常州佐竹・太田における抄物作成活動	1098
四、おわりに	1098
第三節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の古活字版	1098
一、はじめに	1098
二、諸版	1098
(一)諸版	1098
(二)古活字版諸版の関係	1098
1、元和八年古活字版と寛永元年古活字版	1098
2、寛永二年古活字版・寛永五年古活字版・寛永二年整版	1098
三、語学的立場から見た古活字版諸版の本文	1098
四、おわりに	1098
第四節 伝雪庭春積講『禪宗無門関抄』の整版	1098
一、はじめに	1098
二、整版の相互関係	1098
(一)伝存する整版	1098
(二)寛永二年刊記整版二種（上記①②）の相互関係とその出自	1098
(三)寛永一〇年刊整版の出自	1098
1、古活字版諸版との近似	1098
2、寛永元年古活字版と寛永二年整版と覆寛永二年整版	1098
3、寛永二年整版か覆寛永二年整版か	1098
(四)正保三年整版の出自	1098
(五)慶安元年整版の出自	1098
(六)諸版の関係	1098

第二節 国文の注釈書との関係

1282 1276 1274 1273 1273 1272 1271 1269 1267 1265 1258 1256 1256 1254 1254 1253 1253 1251

第一〇章 抄物に連続する室町時代注釈書

第一節 室町時代における諸宗派の注釈書

- 一、はじめに
- 二、諸宗派の片仮名交り注釈書一斑

(一) 日蓮宗

- (一) 浄土真宗
- (二) 浄土宗

(四) 真言宗

- (五) 天台宗

- (六) その他

三、禅僧との交渉

- (一) 日蓮宗

- (二) 浄土宗

- (三) 真言宗

- (四) 天台宗

- (五) その他

四、『詔抄』の編纂

- 五、おわりに

第五節 洞門抄物『聯珠詩格抄』について

- 一、はじめに
- 二、書誌的事項
- 三、原典と抄
- 四、抄の言語
- 〔付〕

第六節 僧の手になる一系統の『三略抄』(服部謙太郎氏蔵本その他)

について

- 一、はじめに
- 二、抄者
- 三、諸本
- 四、中国側注釈書との関係——宣賢抄と比較して
- 五、その言語の性格——宣賢抄と比較して
- 六、終わりに

二、釋迦妙法の関係

1240 1233 1230 1225 1221 1221 1221 1221 1221 1221 1205 1199 1191 1190 1189 1189 1186 1175 1168

第一一章 抄物以後

林羅山の仮名交り注釈書について——抄物との関連から——

一、はじめに	1287
二、羅山と京都五山禪林	1289
三、羅山の仮名交り注釈書	1289
四、抄物との相違点	1289
(一)美学性	1291
(二)自立性	1291
(三)文語性	1291
五、おわりに	1297
結 章	1297
付 錄 抄物関係文献目録	1297
初出一覧	1303
あとがき	1304
索 引	1319
	1323
	1329
	1338
	1442
	1444

室町時代語資料としての抄物の研究 〔下冊〕

第一節 清原業忠の論語抄について

一、業忠の講義

清家抄物の原形が早く清原良賢において確立されており、六代の子孫宣賢がそれをかなり忠実に利用して彼の抄物を作成したことについては、阿部隆一博士の(注1)研究等によって明らかにされて来たところであるが、筆者もその点について考察したことがある。(注2)その、『三略抄』を資料とした拙稿の結びにおいて、良賢と宣賢とを結ぶ中間に位置するところの、宣賢の祖父に当る業忠の抄物に関する考察が必要であることを述べておいた。この問題についても既に阿部博士の論じられているところであるが、その驥尾に付いて幾らか考察をしてみたい。

よく引用されるところの『碧山日録』長禄三年四月二三日の記事や、桃源瑞仙の『百衲襖』第五冊の識語等によつて、その碩学のほどが窺われる業忠は、やはり記録（『建内記』『康富記』『寒露公記』『臥雲日件録』）等によつて、大学・中庸・論語・孟子・周易・毛詩・尚書・礼記・春秋・孝經の経書を度々講義し、更には莊子・古文真宝集をも講じている。(注4)業忠の号環翠軒を、孫の宣賢が継いだのも、業忠に対する強い尊敬の念があつてのことと見られ、宣賢の抄物に、良賢の抄物からの影響とともに、業忠の抄物からのそれも存するものと予想され、というよりこの場合前者よりも一層強い影響を後者から受けているのではないかと考えてみるのが自然であろう。そして、宣賢が業忠から影響を受けたらしいことは確かに宣賢の抄物の奥書などに窺うことができる。

○宝寿院常宗
予六代祖後宝寿院常忠
予祖父等御講聞書并予／侍講席終全部之聞書且正義直解以下引合之抄之／仍不修飾言詞不及草